

医療技術などの飛躍的な進歩に伴い医療の内容は高度化、複雑化してきている。理学療法の対象も、より幅広い年齢層、多様な疾患、障害となり、臨床の場は医療場面にとどまらず、生活の場での実践も当たり前となっている。どのような場面でも、対象者の安全、安心への準備と配慮は理学療法の質の保証とともに何よりも優先され、また積極的に取り組むことが必要である。本特集は安心・安全の考え方に関する知識を整理して学び、さまざまな現場での実践例の紹介や提案を通し、理学療法士が対象者の安心と安全を保障していくための方策について考えることを目的に企画した。

■医療安全の基礎と最新の話題—『WHO 患者安全カリキュラムガイド多職種版』から学ぶ (相馬孝博論文)

2011年、WHOは患者安全カリキュラムガイドという教科書を公にし、医療事故はシステムに内蔵する問題であり、多くのエラーはテクニカルスキルの問題ではなく、状況認識-意志決定-チームワーク/コミュニケーションという階層をもつノンテクニカルスキルの領域で発生していることを明らかにした。一方、リハビリテーション領域は、21世紀に入り、急性期から回復期・維持期へと対象が拡大され、患者安全は医療の連続性が鍵となってきたため、本稿では本ガイドの内容をリハビリテーション領域にいかん反映させるべきかを論じた。

■総合病院における理学療法士の安心・安全への取り組み(梅野裕昭論文)

安心・安全にリハビリテーションを実施するうえでは、リスク管理に対するリハビリテーションスタッフの技術・知識向上、体制づくりなど組織的な対応が必要である。特に日々の臨床場面では、緊急時におけるリハビリテーションスタッフの対応力が重要である。リハビリテーション医療におけるリスクと背景を踏まえ、危険予知トレーニング(KYT)、basic life support・immediate cardiac life support受講など当院におけるリスク管理への取り組みを紹介する。

■クリニックにおける理学療法士の安心・安全への取り組み(石垣直輝, 他論文)

理学療法の質と安全性の向上は、さまざまなリスク低減と治療成績改善に貢献し患者の安心につながる。そのなかで隠さずに報告する文化、チームでリスクに対応する文化が、外来クリニックの安全文化醸成に重要である。この安全文化を加速させるためには「PDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクル」活動を継続させることが鍵となり、クリニックにおける安心・安全を高めるポイントではないかと考える。

■地域事業所における理学療法士の安心・安全への取り組み(布施智行論文)

在宅医療が推進され拡充していく情勢のなかで、サービスを提供する私たちは、関係性構築の第一歩となる接遇と礼節について再認識し、技術として身につけていく必要がある。またその基礎にはサービスを提供する「相手がどのように感じるのか」、「何を求めているのか」という利用者視点を意識することも求められる。また、提供するサービス内容を客観視する機会を設け、内容や目標の適性を再評価し、自分自身の行動を振り返ることが成長につながると考える。

■特別支援学校における理学療法士の安心・安全への取り組み(小玉美津子論文)

神奈川県立特別支援学校では、障害の重度・多様化に対し、2008年より、自立活動教諭(専門職)として「理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、心理職」が配置され、教員との協働という新たなしくみでの教育活動が展開されている。障害のある幼児児童生徒が安心して、学校生活を送るためには何が必要か、神奈川県立特別支援学校に勤務する自立活動教諭(理学療法士)10人への「ヒヤリハット」に関する聞き取り、実践例を報告するとともに、課題や今後の方向性について考察を加える。